『走る辞書』の一日

ぬほほ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『走る辞書』の一日

【Ｎコード】
Ｎ１１８９Ｐ

【作者名】
ぬほほ

【あらすじ】
通称『走る辞書』と呼ばれる天才呪術師のウェンの、起床から就寝までに起こる非日常的な日常の出来事を描く。

午前編　上

まだ日が昇って間もない頃、何やら静寂なこの街に、パッタパッタと軽やかに走る足音が響いている。走っているのは１５歳の呪術師ウェンである。

もう１１月も終わるというのに、けっこうな薄着である。半袖の上に薄っぺらな、例えるなら無印良品で売ってそうな、簡素な白いジャケットを羽織っている。腰のベルトには短剣が差してあり、左腕には包帯が巻かれている。前者は護身用である。後者は、万が一負傷した時のために巻いているだけである。別段、中二とかスイーツ（苦笑）とか、そういう性質の人柄でもない。

身長は、小さい。１５歳だが、１５０ｃｍちょっとしかない。これだけなら「あら可愛い」と思う方もいるだろうが、顔はというと、凛々しい。いや、可愛くないわけではないのだが、この凛々しい顔ならば１６０ｃｍはなくてはならない大人っぽさである。釣り目でもある。凛々しい。黒髪の短髪で、もみあげが無性に長い。これまた凛々しい。もっと言うと、少年に近い。彼女が可愛らしい顔になるのは、ただ一つ、熟睡している時しかないのだ。

さすが『走る辞書』と呼ばれる有名人である、彼女ウェンの一日は、その名の通りランニングから始まる。

今日は３ｋｍ走る予定のようだ。

ウェンが丁度骨董品屋の『クレスメンテの星』（実はウェンの親友

であるホルンが経営している）の角を曲がったところで、よく見かける配達屋のヒューゴを発見した。

「ヒューゴだ」ウェンが呟いて手を振った。ヒューゴは今年二十歳になったばかりの若者で、大概、馬に乗って配達している。「おぉーい」

朝早くのことなので、ウェンは声量に気を使ってそう叫んだ。ヒューゴがウェンに気付いて、

「ウェンちゃんか、おはよう。今日も走っているのかい？」とウェンに近づいた。

「『ちゃん』はいらない。
うん、今日は３ｋｍは知ろうと思ってね」

ヒューゴはウェンを『ウェンちゃん』と呼ぶ癖があった。

「へえ、ウェンちゃんも頑張るね。あ、そうそう、今ウェンちゃん宛ての手紙を渡そうか」
「『ちゃん』はやめよう、な？
あ、んじゃあ、今のうちに貰おうかな」

ヒューゴが郵便袋をごそごそと漁って、ウェン宛の手紙を３つ程取り出して、はい、とウェンに手渡した。ヒューゴは、笑うと中々の好青年である。「どうぞ」

「どうもね」ウェンが軽くお辞儀をして、手早く差出人の名前を眺めて言った。一つ目、二つ目と眺めて、三つ目の時だった。ウェンが驚いたような声を漏らしたのだった。「おっ」

ヒューゴが反応して、ウェンを肘で突っついた。「誰から？　もしかして、彼氏かい？」

ごすっ、とウェンがヒューゴの頭を殴って苦笑いする。「アホを言え」

「東国の女友達から来たんだ。２ヶ月ぶりの手紙だからさ」

頭をさすりながらヒューゴが言う。「へえ。いたたた、仲良いの？　いたたた」

「うん、仲良いよ。今度会うときは本を贈るって行っていたけど、今回はどうかな……」

そう言いつつ、ウェンはポケットに半ば強引に手紙を押し込んだ。

「ぐしゃぐしゃにならない？　それ」

「大丈夫だと思うけどなあ。あ、ほら、配達屋は早く仕事を終わらせちゃいなよ」

ヒューゴは手を振りながらまた馬に跨って、配達を再開した。ウェンもランニングを再開して、折り返し地点から家路への方向へ走り出した。

現在、午前６時４７分。

午前編　中

折り返し地点は、ちょうど鍛冶屋『銀のコルク栓』の看板である。スピードを上げて走ったわけではないが、ウェンは多少、息が上がっていた。看板のつくる影まで走り、その影を踏んでからくるりと身を翻してUターンする。影を踏んでからUターンするのが掟である。半袖の白いジャケットを整えて、またウェンは軽快に走り出した。

街の時計塔を見ると、6時50分とある。戻るには7時を超えるだろう。ともすれば10分になるかもしれない。少し疲れているが、仕方がないな。ウェンはスピードを少しだけ上げた。

実を言うと、ウェンが走ってきたこの道は若干坂道になっている。行きはよいよい帰りはこわい。折り返すと上り坂となる。そこまで角度が高いわけではないが、長さがあるのでこれがけっこう辛い。脇腹に来る例のあの痛みである。昨晩、珍しく夕食をガッツリ食べた（兄貴分が経営するレストランで）のも重なって、思わず「うぐぐ」呻るような声を上げて、それでもウェンは走った。

途中の市場街を抜けきった頃には、それなりに汗をかいていた。ここを過ぎると、家が近いという安堵感も重なって、疲れが和らぐような気がするのだ。依然坂道は続くが、むしろ折り返すときよりも、気が楽になっていた。口笛を吹く余裕もあった。

占い屋の前を通り過ぎた時、赤い羽根帽子に黒いマントを羽織った、ポニーテールの少女と遭遇した。

彼女はウェンの親友で、ホルンという。変わった服装ではあるが、『上』でも解説した骨董屋、『クレスメンテの星』の店の若き主人で、芸術家を目指している人である。ウェンと比べ、背は高いし出ているところも『かなり』出ている。念のため伝えておくが、彼女も１５歳である。同じ身長で、１３ｃｍも違うのは内緒の話である。全く皮肉で数奇な運命である。

ウェンに気付いたホルンが、「おはようございます」

「うい、おはよう。どこに出かけるの？」

「今日は実験がございましてね、」ホルンは錬金術師の玉子でもある。「ちょっとばかり遠出になりますね」

「ほほう」ウェンが足踏みをしながら頷く。「溶解実験か？」

「いやいや、溶解を使用しない金属合成をするらしいのでして」ホルンの口調は大体こんな感じである。丁寧だが間延びしている。

「錬金術ってずいぶん進化していくよな」

「そうですねえ。おや、もう７時過ぎですね」

ウェンが瞬きする。「え、もう７時過ぎか」

「ああ、すまないね、出発の時間なのに邪魔をしちゃって」

「いやはや、こちらこそランニングをせき止めて申し訳ないですよ」
「んじゃあ、お気をつけていってらっしゃい」と、ウェンが手を振って別れる。ホルンが手を振り返して、ハッと我に返ったように、やや大きめな声で

「お土産は鉄鉱石でいいですかねー？」と叫んできた。この錬金術師のセンスと嗜好は、一般人と中々ずれている。

「おーぅ、ありがとうなー」こっちもこっちでセンスが偏っていた。本心である。どういうわけか、マニアックな二人組みである。

家が見えた。と同時に向かいにあるレストラン、リベルテもくっきりと見えた。このレストランが、先ほどウェンが夕食を食べたと説明したレストランである。そこまで大きい店というわけでもないのだが、飾り気のないシンプルな構造と、店主バダム（２５歳。ウェンと肩を並べるくらい有名人で、何かとハイスペック）の著名性から、なかなか客の数が多い。ここ、エラールの観光ガイドブック、『エラールの絶対に寄っておきたい店ガイド　☆隠れ家的激ウマ料理店ランキング５０☆』に、３位という素晴らしい功績を残した。率直に美味しい店である。特にパンと魚が旨い。それと山の幸も旨い。キノコの生クリーム煮は一度でも食べてみた方がいい。それと、

店内にお菓子コーナーもあるのだが、これも旨い。手作りである。特に紅茶のシフォンケーキを食べると、何だか紳士か淑女になった気分になれる上品さがある。

せっかくなので、ウェンが経営する薬屋についても紹介しよう。『樹のおと』という、薬屋にしては洒落た外装である。黒褐色の木造建て。家と兼用で、1階が店である。店に入ると、木管楽器のアンサンブルのレコードが流れている（店名の由来がこれである）。薬独特のあの苦い匂いは無い。代わりにハーブで出来た香の素朴な香りが漂う。薬の種類はかなり多い。そのうえ、店主のウェン、あるいは彼女の師匠であるラハドに頼めば、特別に薬を作って頂ける。価格は普通である。安いわけではないが、むしろ薬が安いのは問題である。何故なら、薬のように健康に関わる商品が廉価だと、安心感に欠けてしまうからである。ただし、のど飴以外の薬は、すこぶる苦い。

話を戻して――ウェンはほっとため息をついて、自分の家を遠巻きに眺めた。親愛なる我が家。多分、7時を過ぎたのだからあのラハドも起きていることだろう。ラハドは少々目覚めが悪いのだ。ウェンがふざけて起こそうとしても、起きた試しがなかった。

それからは、ほとんど短距離走のような勢いで家に向かった。家が近づくにつれて、ウェンは楽しくなった。家の側面にある、ラベンダー畑から強い匂いが香ってくる。

と、その畑の中にラハドがいた。なんだ、やっぱり起きていたのか。ウェンがおーいと手を振って、「ラハドー！」と叫んだ。ラハドはゆったりとした服の上からポンチョを羽織っていた。

ラハドがウェンに気付いて笑みを浮かべた。軽く手を振り返し、「戻ってきたか」

ラハドは褐色の肌と、その高い身長（１９２ｃｍ）と、長い髪、隻眼が特徴的な、ウェンの師匠である。刀を使う剣士である。同時に、ウェンの義理の叔父として共に生活している。礼儀をわきまえている武人のような男である。左利きだが、箸はちゃんと右手で使う。箸の扱いも上手い。会釈をするときにも、どことなく気品が漂う。しかも気取ってそうしている訳ではなく本心でそうしているので、全く不快感が感じられない。

ただし、初対面の人に対して表情が固いとよくウェンに指摘される。口数も少ないので、方からすれば『厳格』とか『怖い』という印象を与えかねない。悪い人じゃないのだが。

「ただいｍ――」ウェンが畑の柵をひょいっと飛び越えようとしたその時である。気分の割に足はばてていたらしい、右足は柵を飛び越えたのだが、左足ががつんと引っ掛かった。こちらに気付いたラハドが、瞬時に「あっ」という焦った表情になった。だが、どうやら間に合いそうに無い。グルンと一回転して、ウェンは背中から勢いよく転んだ。

「おあっ！」豪快に転んだ割に、そこまで血まみれにはならなかった。走る辞書も転ぶのである。手に持っていたかごを半ば投げ捨てるようにして、ラハドが近寄ってきてくれた。「大丈夫か？」

目が回っていたので、ウェンはぶんぶんとかぶりを振って、「うー、やっちまった」

「土まみれになってしまったな」ラハドがウェンの肩についた土を落としながら、苦笑いして呟いた。

「本当だよ全く」擦り剥いた膝頭を観察しながら、ウェンが立ち上がった。「ん、ありがとね」

午前編　中（後書き）

続きます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1189p/

『走る辞書』の一日

2010年11月29日16時44分発行